

# 俳句の主観性・客観性に関する初学者の好みと性格特性

佐藤手織\*

## The Novices' Liking for Subjective/Objective Haiku and Their Personality

Taori SATO\*

### Abstract

The main purpose of this study was to examine the relation between novices' liking for haiku and their personality. The results were that extroversive subjects like haiku more than introversive ones and their especially favorite haiku was subjective, lyric, and prosaic, which qualities are not supposed to be traditionally essential to haiku. Further research will be required to examine the latter point.

**Key words**: haiku, subjective/objective, extroversive/introversive

### 背景・目的

極端な短詩型である俳句において、省略は技法上の重要な位置を占める。またむしろ省略を適切に用いることによって、明示されている以上の内容を表現することが可能になる。中でも、主観表現の是非の問題は、昭和初期に秋桜子が「主観・抒情」を強調して虚子の「客観写生」主義に対立した（水原，1952；倉橋，1989）ことや、個性や人格の表現を近代芸術の要件とする桑原武夫の「第二芸術論」により戦後の俳句界が大きな衝撃を受けたことに代表されるように、単なる俳論上の問題に留まらない俳壇史上の現実の大きな争点でもあった。

鑑賞者が、主観性の強い俳句・客観性の強い俳句のいずれを好むかは、俳論の知識を踏まえた論理的な判断のみならず、鑑賞者の性格・感性に拠るところが大きいと考えられる。たとえば、「理科系統や法律など、ものを的確にいいとめる学問をしている人の方が（俳人として）有

利である」（大岡，2001）や「（『俳句の人間』は『短歌の人間』と比較して）客観的で冷静，自己をも茶化す道化的精神の持ち主」（坪内，2000）などのように、俳人や俳句愛好者の性格についての記述が文芸評論等で散見されることがある。これらはもちろん実証的な研究ではなく、印象による思弁やレトリックの域を出ないが、秋桜子が俳句による主観表現に短歌の「調べ」や連作形式を生かそうとした経緯や、主観を抑制した非個人的な客観描写こそが結局は俳句の本質であるといった評言が主流となっている現状（小西，1995；仁平，2000；高橋，1991，1999；外山，1998）を考えると、上記のような性格の持ち主が好むのは特に客観的な俳句ではないか、との仮説が成り立つ。

本論では、虚子・秋桜子が主宰した「ホトトギス」「馬酔木」系統のさまざまな俳句に対する「好ましき」評定に基づき、(1) 初学の鑑賞者に主観的・客観的な俳句のイメージが形成・区別されているか、(2) 俳句の「好ましき」と鑑賞者の性格がどのように関連するか、を検討することを目的とする。

平成16年12月17日受理

\* 総合教育センター・助教

方 法

被験者：東北地方の私立1大学および国立1大学の人文学部系学生122名（男子37名・女子85名）を対象とした。本研究では、俳句の「好ましき」評定に及ぼす性格の影響を検討することを主目的とするため、俳句の知識の影響を考慮しなくてよい初学者を対象とすることが望ましいと考えられた。上記の被験者は全員、事後のチェックにおいて、刺激として提示された俳句を0～2割しか知らないと回答しており、初学者と判断して差し支えない。ただし、俳句に対する興味・関心、ひいては鑑賞意欲・感受性は

必要と考えられた。人文学部系の学生を被験者として選んだのはその理由による。

刺激：大岡信「折々のうた～第十 折々のうた」および山本健吉「現代俳句」を主な引用文献として、28の俳句を選定した(表1)。その大部分は、「ホトトギス」「馬酔木」両系列から選ばれた、それぞれの主要な特徴である「客観写生」「主観性・抒情性」をはっきり示している句である。前者の代表例としては「流れゆく大根の葉の早さかな」「瀧の上に水現れて落ちにけり」、後者の代表例として「来しかたや馬酔木咲く野の日のひかり」「バスを待ち大路の春をうたがはず」などが挙げられる。また、初期の「ホ

表1 刺激として用いられた俳句（俳人名に続くカッコは系列を示す。(馬)は「馬酔木」、(ホ)は「ホトトギス」の系列)

愛されずして沖遠く泳ぐなり	藤田湘子 (馬)
鮫鱈の骨まで凍ててぶち切らる	加藤楸郎 (馬)
うすらひは深山へかへる花の如	藤田湘子 (馬)
をりとりてはらりとおもきすすきかな	飯田蛇笏 (ホ)
風吹けば白百合草を踊り出づ	山口青邨 (ホ)
雉子の眸のかうかうとして売られけり	加藤楸郎 (馬)
啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々	水原秋桜子 (馬)
桐一葉日あたりながら落ちにけり	高浜虚子 (ホ)
くもの糸一すぢよぎる百合の前	高野素十 (ホ)
くろがねの秋の風鈴鳴りにけり	飯田蛇笏 (ホ)
来しかたや馬酔木咲く野の日のひかり	水原秋桜子 (馬)
金剛の露ひとつぶや石の上	川端茅舎 (ホ)
瀧の上に水現れて落ちにけり	後藤夜半 (ホ)
風の糸二すぢよぎる伽藍かな	高野素十 (ホ)
闘鶏の眼つぶれて飼はれけり	村上鬼城 (ホ)
ところてん煙の如く沈み居り	日野草城 (ホ)
流れゆく大根の葉の早さかな	高浜虚子 (ホ)
夏草に機織車の車輪来て止まる	山口誓子 (馬)
夏の河赤き鉄鎖のはし浸る	山口誓子 (馬)
バスを待ち大路の春をうたがはず	石田波郷 (馬)
春ひとり槍投げて槍に歩み寄る	能村登四郎 (馬)
向日葵の薔を見るとき海消えし	芝不器男 (ホ)
吹きおこる秋風鶴を歩ましむ	石田波郷 (馬)
冬菊のまとふはおのがひかりのみ	水原秋桜子 (馬)
冬蜂の死にどころなく歩きけり	村上鬼城 (ホ)
プラタナス夜もみどりなる夏は来ぬ	石田波郷 (馬)
麦車馬に遅れて動き出づ	芝不器男 (ホ)
我庭の良夜の薄湧く如し	松本たかし (ホ)

トトギス」において主観性が強いと評されたいわゆる「大正主観派」や、「馬酔木」系列には一時所属していたに過ぎないが、「硬質」「都会的」と評される独自の抒情性により俳句史に大きな地歩を占めた誓子の句も含まれている。

手続き：1ページに3つの俳句が印刷されたアンケート冊子が、心理学関係の講義時間を利用して配布され、被験者は各自のペースで俳句を鑑賞し、その「好ましき」について5件法で（1「全く好ましくない」～5「とても好ましい」）評定するよう求められた。また、同じ時間帯に、被験者は、淡路式向性検査とYG性格検査を受検した。

### 結果・考察

刺激として用いられた俳句についてのイメージを分析するため、鑑賞者の「好ましき」評定値について因子分析（主因子法、バリマックス回転）を実施した。スクリー・プロットより3因

子解を適当と見なして探索的因子分析を行い、さらに① 負荷量が0.4以上となる因子がない② 複数の因子について負荷量が0.3以上である、ことを基準として不良11項目を削除し、確認的因子分析を行った（累積寄与率37.3%、表2）。因子1に負荷量の高い俳句群には、蛇笏・秋桜子が2句ずつ、青邨・湘子・たかしが1句ずつ含まれている。具体的には「風吹けば白百合草を踊り出づ」「くろがねの秋の風鈴鳴りにけり」「啄木鳥や落葉を急ぐ牧の木々」など、美しさ・重厚さ・高雅さを感じさせる俳句群であり、因子1を「格調」と命名した。因子2に負荷量の高い俳句は、鬼城の2句に加えて楸邨・誓子・素十の句である。鬼城・楸邨の句は自己憐憫、誓子・素十の句はそれぞれ即物非情・不気味さが特徴と言え、いろいろな意味での陰性感情を喚起させる。「非情」の因子と命名した。因子3に負荷量の高い俳句群は、虚子・草城・登四郎・不器男・波郷らの1句づつで、俳壇史に沿った

表2 因子分析結果

	因子1	因子2	因子3	共通性
風吹けば白百合草を踊り出づ	0.65	0.04	0.13	0.44
くろがねの秋の風鈴鳴りにけり	0.64	-0.24	0.06	0.41
啄木鳥や落葉を急ぐ牧の木々	0.58	0.01	0.13	0.36
うすらひは深山へかへる花の如	0.57	0.06	-0.12	0.33
来しかたや馬酔木咲く野の日のひかり	0.50	-0.09	0.04	0.26
我庭の良夜の薄湧く如し	0.48	0.18	0.27	0.33
をりとりてはらりとおもきすすきかな	0.46	0.03	0.10	0.23
冬蜂の死にどころなく歩きけり	-0.05	0.81	0.11	0.68
鬪鷄の眼つぶれて飼はれけり	-0.13	0.63	0.21	0.46
雉子の眸のかうかうとして売られけり	0.08	0.57	0.12	0.35
夏の河赤き鉄鎖のはし浸る	-0.03	0.49	0.17	0.28
くもの糸一すぢよぎる百合の前	0.20	0.42	0.15	0.24
流れゆく大根の葉のはやさかな	0.12	0.13	0.75	0.59
ところてん煙の如く沈み居り	0.01	0.25	0.61	0.44
春ひとり槍投げて槍に歩み寄る	0.06	0.18	0.61	0.41
麦車馬に遅れて動き出づ	0.24	0.26	0.47	0.34
プラタナス夜もみどりなる夏は来ぬ	0.16	0.08	0.42	0.20
固有値	2.35	2.04	1.94	
累積寄与率 (%)	13.8	25.9	37.3	

解釈は因子1・2以上に困難である。具体的には「流れゆく大根の葉の早さかな」「麦車馬に遅れて動き出づ」などの写生句に加え、「ところてん煙の如く沈み居り」の比喻表現が「言われてみればその通り」「言い得て妙」の印象を読者に与える。「発見」の因子と命名した。因子1～3のそれぞれに負荷量の高い俳句群には、「ホトトギス」系列・「馬酔木」系列の作品が混在し、単純に俳壇史に沿った形で因子を解釈することは難しい。しかし、因子1・2それぞれについては陽性・陰性の感動・感情を容易に読み取ることができる一方、因子3では個性の発現が極力抑えられている印象があり、初学者なりに主観的・客観的な俳句の概念カテゴリーは成立していると考えられる。

鑑賞者の性格と俳句の「好ましき」: まず、向性検査の結果にしたがい、被験者を外向群22名

(向性得点121点以上)・内向群23名(向性得点79点以下)に分類し、「好ましき」評定値を従属変数とした2要因(被験者間要因(向性):2×被験者内要因(因子):3)の分散分析を実施した。その結果、因子の主効果が1%水準で有意(図1参照)であり、さらに下位検定(Tukey法による多重比較)では、すべての因子の組み合わせにおいて5%水準で有意差が見られた(格調>発見>非情)。次に、YG検査の採点結果により被験者をA～E類に分類した。B～E類(B類24名、C類13名、D類23名、E類29名)についての「好ましき」評定値を図2に示す。(図1・2の「好ましき」評定値は、各因子ごとに算出された、負荷量の高い上位3句に対する「好ましき」評定の平均値である。)性格の情緒安定性(安定、不安定)・向性(外向、内向)を被験者間要因、因子を被験者内要因として、3要因の分散分析を実施したところ、因子の主効果が

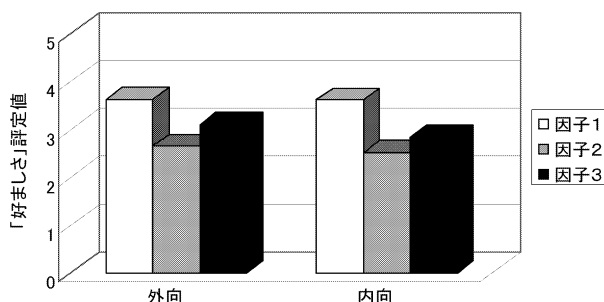


図1 俳句の「好ましき」と向性検査の結果との関連

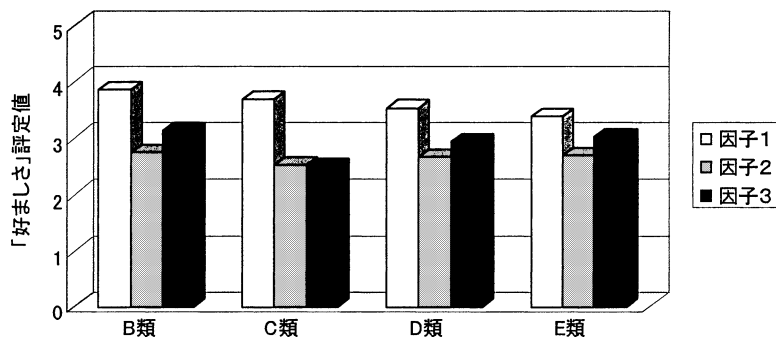


図2 俳句の「好ましき」とYG検査の結果との関連

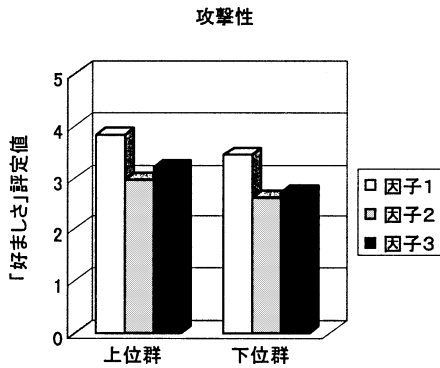


図 3.1 鑑賞者の攻撃性と「好ましき」評定値

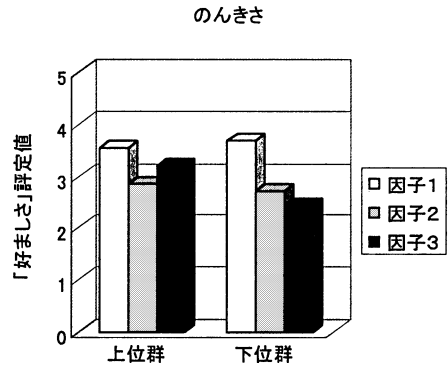


図 3.2 鑑賞者ののんきさと「好ましき」評定値

1%水準で有意であり、さらに下位検定(Tukey法による多重比較)の結果、すべての因子の組み合わせにおいて5%水準で有意差が見られた(格調>発見>非情)。以上の分析から、因子の主効果について一貫した有意性が見られたことになる。主観性と関連すると考えられる因子1・2がそれぞれ「好ましき」の最上位と最下位を占めているため、鑑賞者の「好ましき」を特定するのは、主観が表現されているかどうかではなく、表現される主観の質と考えられる。客観性と関連する因子3は、主観表現に関してneutralであるため、「好ましき」が中間的な順位となったのであろう。一方、本調査の主要な関心事である、鑑賞者の向性と俳句の「好ましき」との関連性については、向性検査・YG検査いずれの採点結果によっても、有意差は見られなかった。そこで、この点について補足的な考察を行うために、以下の2つの分析を追加した。第1は、YG検査の12の下位尺度の粗点を用いた分析である。それぞれの尺度について被験者を粗点の上位群・下位群(それぞれ20名程度)に分類し、「好ましき」評定値を従属変数とした2要因(被験者間要因(粗点):2×被験者内要因(因子):3)の分散分析を実施した結果、「攻撃性」「のんきさ」においてのみ上位・下位群の差が有意であった(図3.1,3.2参照、前者は $p<.10$ 、後者は因子3においてのみ $p<.05$ )。両尺度ともに「外向」型の特性であり、粗点上位群の「好

ましき」評定値がより高かった。第2に、鑑賞された28の俳句すべてについて、鑑賞者の向性による「好ましき」評定値の違いを検討した。この場合、YG・向性両検査の結果を踏まえて、被験者が分類された。YG検査でB・E類に属しかつ向性検査の得点が120点以上の鑑賞者が外向群(23名)、YG検査でC・E類に属しかつ向性検査の得点が80点以下、もしくは単に向性検査の得点が60点以下の鑑賞者が内向群(22名)である。その結果、26の俳句で、外向群の「好ましき」評定値が内向群よりも高く(図4)、ノンパラメトリック検定では1%水準で有意と認められた。また、表3.1,3.2に、外向群と内向群の「好ましき」の差が大きい俳句と小さい俳句をそれぞれ示す。この結果から、外向群が特に好む俳句の性質を明確に特定することは難しいが、2つの表の比較を通して、以下いくつかの可能性を列挙する。(1)表3.1の俳句の作者は、不器男・湘子・楸邨・誓子・波郷・秋桜子らで、不器男以外は(一時的な参加者も含めて)「馬酔木」系統の俳人である。この系統の特徴は、「主観性・抒情性」であり、不器男の俳句にも十分に「抒情性」が認められる。(2)表3.2の上位を占める俳句では典型的な切れ字(や・かな・けり)の使用が目立ち、ある意味古風な印象である。一方、表3.1の俳句は、「切れ」が弱く、散文的な印象を与える。(3)表3.1には、確認的因子分析の段階で不良項目として削除された俳句が多

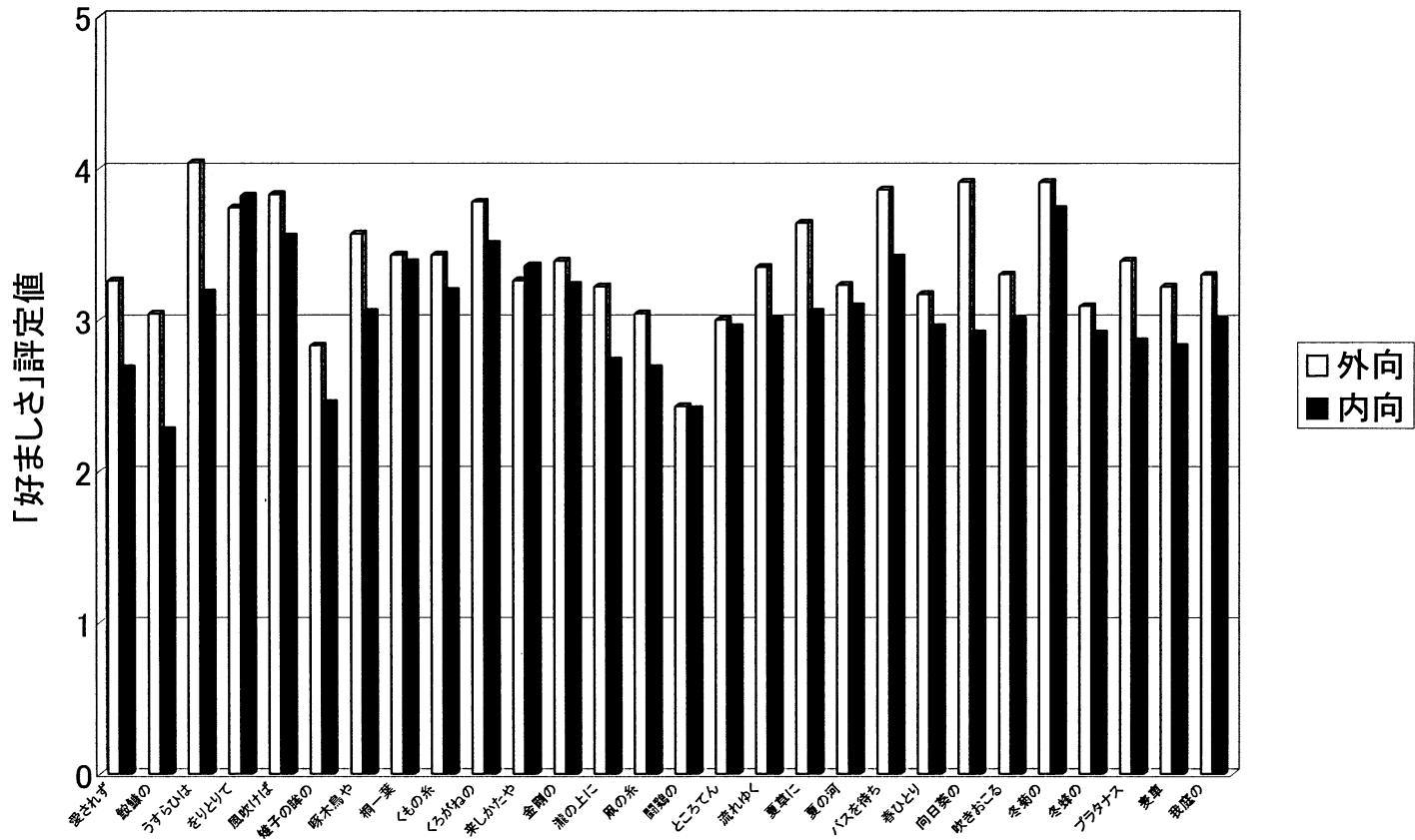


図4 鑑賞者の向性と「好ましさ」評定値

表 3.1 向性による「好ましき」評定値の差が大きい俳句群（外向型>>内向型）

「好ましき」評定値	外向型	内向型	外向型－内向型
向日葵の蓋を見るとき海消えし（不器男）	3.91	2.91	1.00
うすらひは深山へかへる花の如（湘子）	4.04	3.18	0.86
鮫鱈の骨まで凍ててぶち切らる（楸邨）	3.04	2.27	0.77
夏草に機織車の車輪来て止まる（誓子）	3.64	3.05	0.61
愛されずして沖遠く泳ぐなり（湘子）	3.26	2.68	0.58
ブラタナス夜もみどりなる夏は来ぬ（波郷）	3.39	2.86	0.53
啄木鳥や落葉を急ぐ牧の木々（秋桜子）	3.57	3.05	0.52

表 3.2 向性による「好ましき」評定値の差が小さい俳句群（外向型≒内向型）

「好ましき」評定値	外向型	内向型	外向型－内向型
来しかたや馬酔木咲く野の日のひかり（秋桜子）	3.26	3.36	-0.10
をりとりてはらりとおもきすすきかな（蛇笏）	3.74	3.82	-0.08
闘鶏の眼つぶれて飼はれけり（鬼城）	2.43	2.41	0.02
ところでん煙の如く沈み居り（草城）	3.00	2.95	0.05
桐一葉日あたりながら落ちにけり（虚子）	3.43	3.38	0.05
夏の河赤き鉄鎖のはし浸る（誓子）	3.23	3.09	0.14
金剛の露ひとつぶや石の上（茅舎）	3.39	3.23	0.16

く、独自の印象を与える。以上、2つの補足的分析の結果を総括すると、外向型の鑑賞者は内向型よりも俳句を全般的に好むが、特に主観的・抒情的・散文的な俳句を好む、ということになる。この知見は、[背景・目的]ですすでに指摘しておいた仮説のうち、特定の性格の鑑賞者が俳句一般を好む可能性を裏づける一方で、彼らが特に好む俳句の性質が俳句の伝統的な本質とは考えにくい点において問題を残す。彼らの俳句の好みは、主観性を俳句の本質と認識した上でのものか、それとも単に、彼らの詩・文学に対する親和性、ひいては、経験への開放性や興味の高さを反映しているのか？この点については、今後の検討が必要となろう。

## 引用・参考文献

- 小西甚一 1995 俳句の世界 講談社学術文庫  
 倉橋羊村 1989 秋桜子とその時代 講談社  
 桑原武夫 1976 第二芸術論 講談社学術文庫  
 水原秋桜子 1952 高浜虚子 文藝春秋新社  
 仁平 勝 2000 俳句をつくろう 講談社現代新書  
 大岡 信 2001 百人百句 講談社  
 大岡 信 1980～1992 折々のうた～第十 折々のうた 岩波新書  
 高橋睦郎 1991 虚なるかな夫子－乱好む人誰々ぞ 弓始「五百句時代」 国文学 10月号 「虚子と虚子以後 現代俳句の大動脈として」 38-43  
 高橋睦郎 1999 百人一句 中公新書  
 外山滋比古 1998 俳句的 みすず書房  
 坪内稔典 2000 俳句の人間 短歌の人間 岩波書店  
 山本健吉 1962 現代俳句 角川書店